ひとのをくし

古学

全

中村俊定文庫
文庫 18
231

鄙筑波序

我聞和歌者始子下照姫紀于素盞烏尊難波津之詠勸皇位吟安積山之言解王心宜所以物換情遷而使感鬼化人莫過於是也誹諧歌者振古為其一體猶詞林者奇花矣予嘆人生于條津島根永沿世平之恩波

陵定藏

儁哉。可胡看不依此道者乎。宗
祇氏為建部之祖而来。守武宗
鑑貞徳等其能鳴者也。雖然遊
子之中間者。或祖於彼師於此
其類不一焉。近豎桃青樗節於
千里之外。俳徒彈偃之風。其雅
壹是隆于東都也。嚮年祇空屢
訪余小齋。袁蒙燭清談禪也

詣也。吟酬若子首。豈啻熟于俳
耳。其支流波光生。一日袖来
小冊子請序其端。俳皆追石霜
菴之遺風者也。素云鄙筑波名
之若誰乎。惟鄙者之謙辭也。蓋
淮種玉菴之書號。且擾筑波山
茂蔭。謂歟。余又久辱子此道。故
不能默。乃髯第子知語文。聊杜

其需而已。含英咀華士。英詰咀

我言耄。

宵保歳次乙卯重陽日

瀟雪道人岩岑水題

ひかきくき

名月やこえてもくたる山　汝光

落ちの弱形の穂すき　九皐

軒口をすゆく鳴乃ゆきて　祇徳

月あの家とも立ぬ学問　汝

さきそ秋ちの藤を　九

きのふから好景色ひ　祇

ウ 羽舟の幾月も見ゆ霧やき　攻
負しきくやゆ紀氣の子　九
悔いゝ口ゝ下きうちのら付ケ　祇
刀をれて沒の間へ行く　攻
陣中り連歌の舎ゝ野けさよ　九
ちうつゝ所しみう勝乃　祇
逢すぐいつと泪乃底を　攻
忘れるまり二さゝ梯　九

ちゝり祝云乃あれ仕立物　祇
乾年去年ゝ暦也り　攻
庚申ゝ敷屋ゝ義堂　九
祀ゝいゝ敵の白酒　祇
ナ 此ゝ伝勢乃伯文法乃　全
徒の笑てゝ徒ゝ公る　攻
あゝゝそゝくゝ細乃　全
尺ゝゝゝ敵能　板乃とき　九

小むさしの日よりさしたる板の皮　九
今度乃茶ハ橋乃かいろ紀　汶
役人ゟ四十あまりを以宮引　仝
鞠子ゟ川乃とまれ　盃通　祇
乃止りゟ所ゟ寒紀蛙の尾　全
五ゟ所ゟ見て安ものゟ　九
枝茶のゟ材をの色ゟる盃の上　仝
娘乃幸ゟ見ゟ安堵乃歌　汶

どうぶつゟ皆ゟつゟきり袖ゟ　全
志のふくゟと乃ゟ乃ゟ　祇
古寺ハむしゟやゟらふぐ煮き　九
西も南も咲ゟる　義　汶
ゟん乃ゟと富士ゟふ見ゟ　祇
遠きゟゟ（年紀乃状　九

白もかくハるか雪か筑波山　爲邦
翌年旅人と　汶光
鶏八聲霄か酒盞醒果て　直貫
月見か庭きとりたちて　祇明
うらうと河かあちらの芋畠　祇徳
初年さけて木場か　空翠

ウ

菓俵を二階へ上げ行ひて　汝光
世尽をふるうらし　行乃振舞　為邦
おとがしく見ゆる和尚乃衣　祇明
國の守あて下る好　忠　血貫
古家乃示村の家乃杉の枝　定摩
毎ひとしと扇をむる　祇行
ちのうち切ぐ雙ちやくと　為邦
まゝあるを行をらあけ　汝光

窮屈な舟の文乃家乃　血貫
さむらむ流乃花見　定摩
妻ハまぐ鍬むる足らぬ　祇行
清忘れつゝあ岩を結ぶる　祇明
角入くみくけ小成　定摩
とみ乃小路の家　為邦
跡はなきて飛鳥乃　汝光
鴉来て鳴く古郷乃枝　血貫

燈けるを焼をむる事流石川
新まをうつる所尼寺北妹　祇明
ほうそう垣根を昭菓の花　祇依
いつも繁る桜森なる身　為邦
又母を金八望女　娘の事　白翠
裏の女房の錦入手来る　血栄
約束の小鳥をくれる内　祇明
二日続いて北風の如く　祇依
　　汝光

五六艘引あげて海の舟　空翠
此一村をとりの内　強　為邦
むらを見人と呼ぶる餅の表　汝光
麻もの語りも借金の頃　血栄
ひろ袖の稲穂の花　祇明
遠りの者ぞ　祇徳

発句之部

祇空居士

塔乃峯ゆ春色かなら[illegible]夕
[illegible]の鐘をもれ[illegible]人も心の
[illegible]あの夏也

松尾や寺あ[illegible]を岑[illegible]花

素丸

乃遠ひ国ゆ[illegible]のつもあ[illegible]

ひろ海ちきりあるとり雪の峯
名月や流れ行者の舟り酒

雨花

為ぶ行間よ法ゐ高ふえて鹿なのぶらむ

麦阿

雨乃日鶴鉢ふりやぬ柳か
惜れ郭公鶴も尺くるり鶴の箱
鶴蔦も錦ふ龍ふりや菊の茶

鶯や炭を屏風り立なくら

珪琳

澤菴和尚の古墳を弔ふ

茶ゐる茶ふ茶ふ赤て梟ゐくる夕れ

宗瑞

、

橋臺ゐ茶の茶咲ふり船渡
折ゐ型免屋森の風を尺ゐ
月折ゐ雪よ休て躍ゐふ

此日より籠[鏡]の裏むこうに煤をうひ

臥尺

皂[白]角結さ屋敷やうや神世春

喬谷

刈あつ[ま]れ人こ桑[稲]の[ち]ぬ[ま]ぬ

曉雨

子を[ま]ぶて梅ハ青ク白ひう郎

瓦ヶ山ク雲[白]を[て]尺る暑さこう

前歳ク[の]枝の実ク小路ク

ハおの籠より[子]ぶき落葉ク

烏邦

枝ク雪ク[の]ぬ[ま]ぬ[の]ぬ

ひとる結ぶ[ま]ぬ[ま]ぬ

舞やけ[ま]ぬ[ま]ぬ花の形

紙明

物ク舞も雪ク蕉のひとつか

時雨よい茶をのみてゆかぬ淋
朝くの心ゆかぬ水仙かな　魚貫
茶屋を出て三茶屋に茶又茶菓茶菓哉　空翠
古寺やまゝ人を見ぬ門の雲
和尚や月雪波打ち所
未急ぎやとまいそ山うら
我ゝ子を人よ行て我ゝき
ふ柏子よ寺もめてゝき蕎麦　祇徳

小刀で鶯くゝる魚や　このきくらく

この句は先年立志の舎にて附合也　中略　作者

盃に蘭盆の流もあり　踊堂

そも我業もみくるしく成やりさの　霜

梢雨

くれ井戸に成ぬすくるゝ枯蘆

半秋

初雪ぬきもらすわくや小菜畑

魯雞

呼入て朝茶坊ぬん紙くれ

汶光

蜂の巣を猫よ去のふけつ思さ

夕去も人のすけよ新寺の門

菊月や十日ゐるとすへの芝

芝へなる紅葉のちるや枯野原

辻堂の市ゝ[illegible]

岑水

江湖の水鳥人ゝ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]郷を懐ふ心とし
川[illegible]
和[illegible]一ひらすも無ゝ石

何[illegible]
屏風を[illegible]
みゝ[illegible]野ゝ岸[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]
舟の[illegible]

紋光

[illegible]

中納言輝[illegible]

秋の野やあらゆる草の盛

妻ちるぬ風のきさや竹の花

九皐

いろ〳〵ち人り遊ぶ野や花さのわ

[illegible]

山間のひとつ[illegible]

[illegible]

[illegible]

山井紅葉

角をうつる小鹿や[illegible]

ふもとや[illegible]の上

祇徳

死ちう[illegible]人さらま明　花の山

葬やきのふ花ハ[illegible]

下戸明のら酒[illegible]

汝光

げす乃家乃雪乃ふりつも
み月待さし入るも口を
しとの月しえ待る子乃
待もさきの乃月乃ひかり

抽德

和雪やいやしき家の戸口を

筑波郡

四季とも乃冥くなる乃すゑ

筑波郡

乃乃さきの乃鄙さく
春あり乃ゝ乃ら乃ら
酸所
民あゝ乃ら乃事
乃ら満し乃筑波の
乃乃ら乃ら乃ハ春又
仏乃ゝ乃ハ乃さ乃ゝ
仏乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
し吉乃み辭の說說

[illegible]への
[illegible]句を似せ[illegible]
[illegible]
[illegible]寺越の離
[illegible]句附[illegible]
[illegible]ひいき[illegible]
[illegible]八堂類の[illegible]有
[illegible]事[illegible]

[illegible]
[illegible]八[illegible]の
[illegible]をかろ
[illegible]
[illegible]
不[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ひらてを夢のちんの六
安き手の俤
儀き手の俤
いとく自ら新をとらん
とく多く度手河免数
この手
男はもちい紙袖の名を
小もち夫ノ生を殺く

道手中一結ものしを齊
南ノ位光とみて小冊
子をとく好士の
重書を撰んとす
位を儀鳥乃書
をまて難波津の
多こ自梅いよ
ら咲ちやとく白

雪ふる夜の
ねざめ鳥
机にもたる
ものの
あはれ湘南の
うらうらとなる
ひとを申をもかぬ

享保二十歳十一月

啄木彫